



里山薪プロジェクト

薪のある暮らしと 里山の保全を考える シンポジウム



入場無料

お申込み・予約不要

12月14日(土)

14:00~17:00

(開場 13:30)

基調
講演

「薪が生み出す里山保全のチカラ」

奥敬一 農学博士 独立行政法人森林総合研究所関西支所主任研究員

14:00~15:20

パネルディスカッション

敬称略 順不同

奥敬一

独立行政法人
森林総合研究所

徳庄博美

若狭森林(もり)の会
代表

山口昌英

有限会社 JASTY
(ジャスティ) 代表

熊谷もも

主婦 薪ストーブ所有者
高島市議会議員

萩原茂男

NPO 法人森林楽校
森んこ代表

15:30~17:00

主催：NPO 法人森林楽校・森んこ（里山薪プロジェクト実行委員会）

協賛：おおい町 れいなん森林組合 福井県嶺南振興局林業水産部 若狭林研グループ協議会

お問い合わせ：090-2122-9393（ハギハラ） mail@npo-morinko.com

里山と薪ストーブの関係

里山とは？

里山とは、人里（人の住む集落）の近くにあり、人の影響を受けた山のことです。かつて里山は、生活や産業に必要な薪、木材などの燃料や資材、肥料、家畜のえさなど様々なものを採取する場所でした。

今でこそ、暖房や料理をするのには、ガスや電気のスイッチひとつですみませんが、石炭や石油が普及する以前は、里山から薪や柴を集めてきて、囲炉裏や釜戸で火をおこすのが基本だったんですね。



里山の困った変化

今ではほとんどの家庭で、薪や柴などを日常的に燃料として使う事は無くなりました。里山に人が入ることもほとんど無くなったのですが、そのことで困った変化も起きて来るようになりました。

人を恐れなくなった野生動物が里に下りて農作物への被害をもたらしたり、人が杉などを植えて放置してしまった林では、木が育ち過ぎて暗くなり、日光が好きな野草が減っていきます。またゴミの不法投棄などの問題もおきるようになります。

薪ストーブの提案

昔のような生活に戻ることは難しいですが、現代的なやりかたで、もう一度里山の薪を生活必需品にするようになれば、里山を本来の姿に近づけることができるでしょう。そこで薪ストーブの出番です。里山から薪を取って来るのには大変な労力がいるますが、その過程で様々な体験や交流が生まれます。火のある暮らしの中で、これまでとは世の中が少し違って見えてくるかもしれません。そんな新しいライフスタイルとして、里山での薪ストーブの利用を提案したいと思います。

循環型のエネルギー

薪を燃やすと、二酸化炭素が排出されて地球温暖化に繋がるんじゃない？とか、自然を壊すことに繋がるんじゃない？という不安を聞く事がありますが、その薪が伐り出された場所で、再び木が成長する間に、出したのと同じだけの二酸化炭素を吸収するので大丈夫です。薪を使う分、石油を使わなくて済むので、むしろ二酸化炭素の排出削減につながります。石油は地下からくみ上げますが、それが燃やされて出る二酸化炭素は、もう一度もとに戻ることはないですからね。



『薪ストーブがうちにきた』
監修・編著 奥 敬一
2010年より抜粋・再編



奥 敬一（おく ひろかず）東京大学農学部卒業。博士（農学）独立行政法人森林総合研究所 関西支所森林資源管理研究グループ主任研究員。専門は森林景観計画。主な研究テーマは、レクリエーションのための森林景観計画や、里山の成り立ちと変遷・今後の活用と活用。



写真提供：北野隼人